

フィールドワーク築地のまわり 2018 夏

つきじ 築地・中央卸 売 市場 ・明石町・月島・つくだじま 佃 島 そしてとよす 豊洲

このあたりは、大都市東京の中でも、銀座にも近く、江戸時代から栄え、埋
立て 立 なども積極的に行われていたところでした。

又、将 軍 によって、大阪、紀州（和歌山県）から呼ばれて江戸湾で 昔か
ら漁をしていた人々も多く集まっていたところでもありました。

今回、この地域を、フィールドワークの地域に選んだのは、昨今のニュース
でも伝えられているように、平成 30 年 11 月に中央区の豊洲に市場を移す計画
が実質的に決定し、この築地の地での賑 わいも残 すところあと少しという状態
になったこと、又実 際 に東京の下 町 情 緒 の残 されている風景も、再開 発 と
共に少なくなってきた今、再開 発 の陰 に隠 れ失われていく姿 を自分たちの目
を通してさがしてみようと思い計画しました。

築地中央卸売市場

築地中央卸売市場は、鮮魚と青果の仲買卸売りからなる通称『場内』

と、その門前町のように多種多様な小売店が軒を並べる『場外』と、2つの顔を持っている。



築地を歩くには、まず早起きは大切だ。

8時頃に場外市場に到着するくらいで丁度良かったが、こここのところのグルメブームで、見物買い出し組の出足は、いささか早くなりつつある。早朝の喧噪が一段落し、緊張感の余韻が漂う、そんな時刻。あ

まり早くから場内にいると素人は邪魔なだけ、逆に遅いと活気に乏しい。

買い物をするのも良いが、料理人や仕入れのプロの仕事ぶりを眺めるだけでも、行く価値があるのではなかろうか。プロの動きには、全く無駄がない。

場外の雑踏の中を何気なく歩いているようでも、その目でしっかりその日の相場を捉えながら、お目当ての店に向かっているのである。言葉は要らない。

品物と値に納得がいけば、ほしい商品を指さし、数を指で示すだけ。ほんの数秒で。売り手もまたそれでわかる。商い成立！そして何も言わずに立ち去ってしまうのである。

それぞれに、自分なりのコースが決まっているのもおもしろい。

同じような揃えの馴染みは何軒かあるようで、一軒目で気に入った品がなければ、黙って次へと足を運ぶ。ほとんどの人が、まず場外で野菜などを注文し、その後に場内で魚を仕入れ、帰りは同じコースを逆に辿って品物を受け取っている。そうすれば、重い荷物を持って場内に入る必要はないし、品切れの憂き目にあう可能性も少ないからだろう。



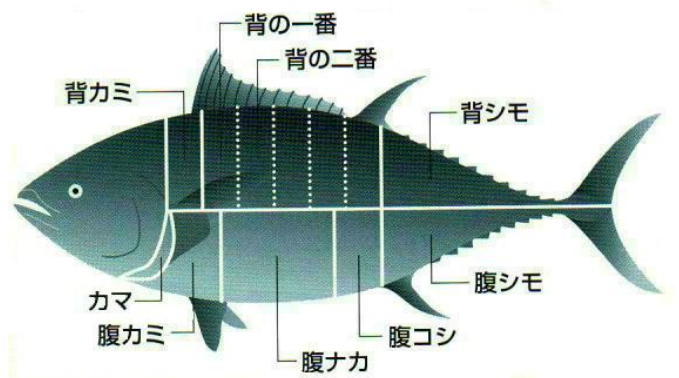
場内の鮮魚の売り場は、まさに戦場。活気にあふれかえっている。素人がこの熱気に太刀打ちするのは至難の技だ。のんびりと魚を眺めていると、後ろから「邪魔だよ！もたもたしてんなよ!!」と怒鳴られるか、ターゲットと呼ばれる荷車にひかれそうになるはずだ。文字通り身を切るような緊張感。売る方も買う方もとにかくプロ。「この築地で商売するなら、客の顔見てほしいものがわかるようじゃなきゃ一人前とは言えねえ。」と言う、威勢のいい仲卸のおやじさんの言葉もあながちはったりではなさそうだ。

築地市場は、プロの流儀と誇りにふれられる今や貴重な散歩フィールドである。1日に何と約2400tもの水産物が取引されている市場。世界から集まった

食材を仕入れ販売する仲卸は、水産物だけでもその数830店に及ぶ。マグロ専門店からなる「大物業界」や、すしだね専門店が集まる「特殊物業界」など、各店は

専門分野により15の組合に分かれてい

マグロの部位



ます。

店番号の見方

4桁の店番号は、店舗の場所を示す番号。肩型の売り場は、セリ場側から横一列ずつ1000～8000、イ～ニ番台に振り分けられている。さらに、各列の店舗は青果部側から下3桁の数字が小さいと青果部に近い。

◇ 銀鱗文庫 7号館2F

昔から魚河岸は、歌舞伎や相撲、俳句など芸能やカルチャーと密接な関係を持ちつつ発展してきた。その文化的発展要素を残しておこうと発足したのが、"銀鱗会"。銀鱗文庫は、銀鱗会のカルチャー活動の一環として、築地に関わる書籍や、魚に関する図書・資料などを集めた魚の図書館です。

昭和26年の発足時から現在に至るまで、集めた書籍は8,000冊。魚河岸の歴史がわかる稀少な資料や、高価な図鑑・築地を舞台としたマンガまで多種多様な書籍を取り扱っています。又数年前に発売されて小さなブームを呼んだお魚カルタ 2,200円等も買う事ができます。一般の人にも開放しており、予約なども必要ありません。

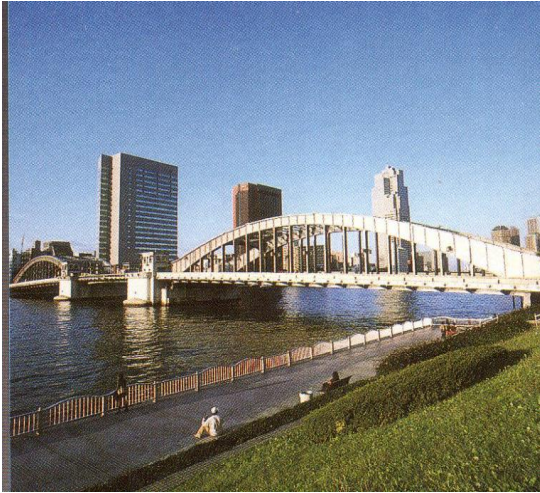
◇ おさかな普及センター資料館

鮮魚店や市場で見かける切り身の魚が、本来はどんな姿で、どんなふうに泳ぐのか？それが知りたくなったらここへ。魚の生態や食べ方についての

知識を広めるために設立されたこの資料館では、魚の標本の他、活きた

築地用語辞典

近海魚も観察できる。ゆっくりと水槽^{すいそう}の中で行き来する鯛、大きな体をくねらせて泳ぐ鮫、鰺の群れ……と、水槽内の魚は全て身近な食用魚。市場で気になる魚を見つけたら、生態^{せいたい}を調べによってみるのにもおもしろい場所である。



魚河岸（うおがし）・・東京都中央卸売市場築地^{つきじ}

市場水産部の通称。築地^{つきじ}へ移転するまでは、日本

橋小田原町界隈の河岸地にあったため、魚河岸^{うおがし}と呼ばれていたのが今に続く。ちなみに「しけ河岸（がし）」とは店じまいする時間帯をさす。

窟（しま）・・築地^{つきじ}移転当時、隅田川と今はなき築地川、東支川に囲まれていた事から、先輩諸氏の中には市場をシマと呼ぶ人もいる。

日本橋時代から力を結束して発展^{はつてん}してきた魚河岸^{うおがし}。旧き良き魚河岸^{うおがし}気質が込められている気もする。

場外市場・・場内に対し、場外。築地^{つきじ}移転の際、場内に入りきれなかった仲卸^{なかおろし}が集まり開店。もとは卸専門だった。約 400 店以上が軒を連ね、一般客が出入りできるようになった今でも、プロの料理人や商店主が足繁く通う買い物スポットとなっている。

ターレ・・昔は、軽子とよばれていた運搬人が操縦する小型三輪。正式名称ターレットの略称。360 度回転し、狭い路地も何のその。市場でなくてはならない運搬手段である。

茶屋（ちゃや）・・仲卸^{なかおろし}から買った品を各地に発送する場所。江戸時代、船で輸送していた頃、荷下ろししやすい上げ潮になるまでお茶を飲みながら待った事から茶屋とよばれる。今やその場所も全国各地へ向かうトラックが並ぶ。

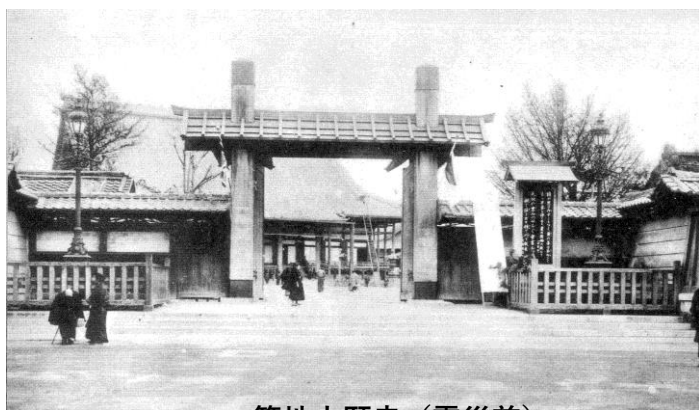
上物屋（じょうものや）・・マグロ専門を"大物屋"と呼ぶのに対し、料亭で扱う高級魚を専門とする店を"上物屋"と呼ぶ。ちなみに多量に入荷される魚を扱うのは、"箱物屋"。関西方面で捕れたアジなどが箱に入ってくる事からと言われている。

デブロク・・手袋のことでも、太った人のことでもない。大きさが不揃いのことをさす。家族や仲間ですべるならデブロクでも十分。「デブロクだけど、味はいいよ。」と言われたら、買ってみる価値あり！

築地・明石町

市場が近いせいか、築地はいたって人間くさい町でした。ずらりと並んだ

新鮮な魚に負けないくらい、生きのい



築地本願寺（震災前）

いかけ声が飛んでくる。ついつい威勢の良さに聞き惚れて、財布のひもがゆる

んでしまう。又、築地警察署裏手の商店街も捨てがたい魅力を発している

エリア。銀座が目と鼻の先というのに、八百屋あり、総菜やあり床屋あり。サ

ンダル履きで買い物に行きたくなってしまうような、生活のにおいがプンプン

伝わってきます。そんな風に気取らない庶民的な顔がある一方で、築地・明石

町界限にはやたらと"発祥の地"が多い。近代劇場が始まった築地小劇場から始まって、活字、靴、税関、蘭学、電信、海軍に指もん研究。

築地はその名が示すとおり江戸時代、人工的に気づかれた新しい土地であ

り、そこに当時の最先端技術が集中していた事がうかがえます。今で言えば、ハイテク化の進んだインテリジェントビルが立ち並ぶウォーターフロントか、虎

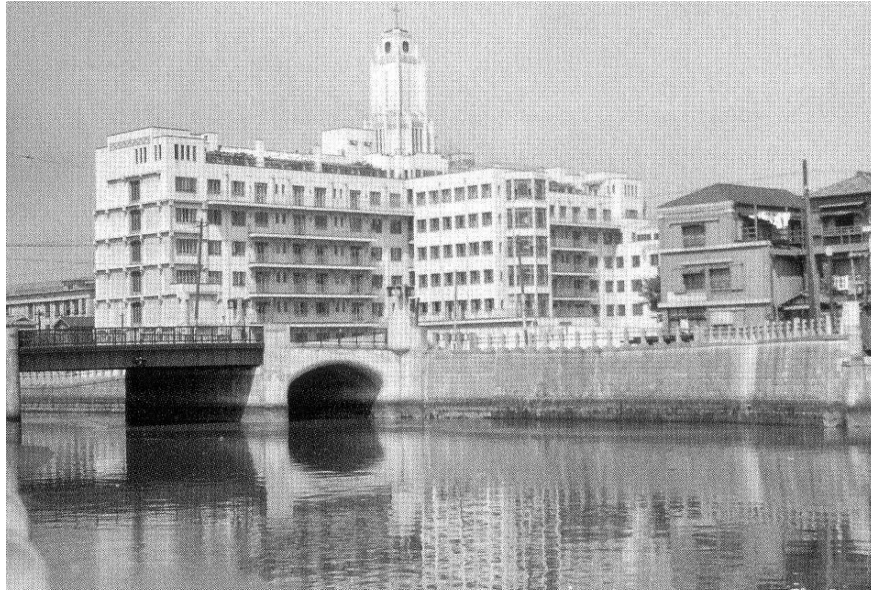
ノ門・六本木ヒルズのようなもの。

隣^{となり} 合わせの明石町もどこか

垢^{あかぬ}抜けて、洒^{しやれ}落た町。それもそのは

ず、実はここ、明治時代は外国人の居留地だった場所。その面影は、聖路加国際病院のたたずまいに今も残っている。この病院を近所の人は「聖路加様」と呼んで親しんでいた。何でも、戦争中、外国人と馴染みの深い聖路加病院があった

おかげで、近隣も爆撃されずにすんだと言うところからであった。



現在、いくつもの学校の発^{はつしょう}祥の地としての記念碑が建てられている。

仲^{なかおろし}卸の役割

—— 消費者の側に立って適正価格を守る ——

◇市場内での売買の行われ方

中央卸売市場^{つきじ}築地市場は、1935年の開場以来ずっと生産者・出荷者－卸売り会社－仲^{なかおろし}卸－買出人－消費者というシステムの中で売買が行われてきました。7つの卸売り会社が集荷した魚介類を830店^{てんぼ}舗の卸売りが仕入れ小売店（魚屋さん）、寿司店や料理店などに販売。消費者は小売店から買うという仕組みになっている。

◇仲^{なかおろし}卸^{つきじ}が築地市場で果たす役割とは

価格はセリで値段の決まるマグロや活魚、活きエビなどを除き、ほとんどの魚介類は卸売り^{なかおろし}と仲^{なかおろし}卸の直接交渉（相対売りという）で決まります。この時、卸売りは生産者の立場から値を付け、仲^{なかおろし}卸は、小売店や消費者の立場に

立って判断し価格を決めます。つまり、仲卸^{なかおろし}の役割は、評価機能になります。

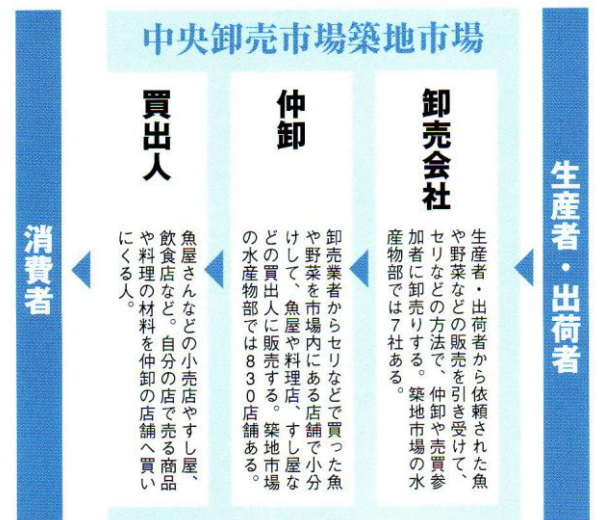
そのような仲卸^{なかおろし}の存在意義はきわめて大きく仲卸^{なかおろし}が市場を支えていると言っても過言ではありません。

ところが近年では、大規模量販店や商社のようなこれまでの市場流通になかった業者が参入し、生産者から直接買い付けて傘下のレストランやスーパーに売るといったケースが増えてきました。市場外流通です。

その流れに対して、仲卸^{なかおろし}も商いの幅を広げようと思っても、法律による規制によって自由に出来ない面もありました。その反面法律に守られ安穩として競争力の低下が見られる面もあった。そこで東京都は、2回にわたり取引の規制緩和を実施しました。

◇今後消費者にとって市場はどのような存在ですか

小売店の了解の下に市場開放^{かいほう}をしたり、一般消費者を対象に市場見学会を開き、消費者の目を魚に向けさせる努力をしていこうと考えています。又、旬の魚のおいしさ、食べ方、調理の仕方などを教えて、その上で身近な魚屋さんで買ってもらうようにするというアイディアも用意しています。



波除神社

今から 350 年程前、この築地^{つきじ}一帯は一面の海でした。江戸開府（1603）時の慶長江戸絵図には、今の日比谷のお堀^{ほり}の辺りまで汐入を描き、八重洲の海岸に船の役所がありました。開府前より始まった江戸城西丸の増築^{ぞうちく}に掘られた、お堀^{ほり}の揚げ土^あを以って日比谷入江から埋め始められた、江戸東南海面埋立^{うめたて}はその

後全国の諸侯七十家に千石に一人の人夫を出させ、後にはその埋立^{うめたて}の役員の名をとり、尾張町、加賀町等と名付けられました。

そして 70 年の後、明暦の大火の後に 4 代将軍家綱公が手がけた最後の埋立^{うめたて}の工事困難を極めたのが、この築地^{つきじ}海面でした。堤防を築いても築いても激波にさらわれてしまうのです。

ある夜の事、海面を光りを放って漂うものがあり、人々は不思議に思って船を出してみると、それは立派な稲荷大神の御神体でした。皆は畏れて、早速現在の地に社殿を作りお祀りして、皆で盛大なお祭をしました。ところがそれから

というものは、波風がピタリとおさまり、工事はやすやすと進み埋立^{うめたて}も終了致しました。萬治 2 年（1659）の事です。

人々は、その御神徳のあらたかさに驚き、稲荷大神に『波除』の尊称を奉り、又雲を従える<龍>、風を従える<虎>、一声で万物を威伏させる<獅子>の巨大な頭が数体奉納され、これを担いで回ったのが祭礼『つきじ獅子 祭』の始まりです。

それ以来今に至るまで、「災難を除き、波を乗り切る」波除稲荷様として、災難除厄除・商売繁盛・工事安全等の御神徳に崇敬が厚いのであります。



その御神徳はその後も益々大きく、当時辺境の地であった築地^{つきじ}も次第々々に開け、現在の如く繁華街となったのであります。



■「勝 関 橋」ってどこに架かる橋



関橋は、隅田川のもっとも下流に架かる橋です。近くには、東京の台所をあずかる築地市場、著名人の告別式で登場する築地本願寺、もんじゃ焼きの月島、晴海通りを反対側に足を延ばせば銀座4丁目も1km圏内の下町に位置します。

■「勝 関 橋」の名前の由来

勝関橋は、明治の時代より幾度となく架設計画がありました。

1905(明治38)年1月18日に日露戦争における旅順陥落祝勝記念として有志により築地と月島を結ぶ「勝関の渡し」が設置されました。この渡しに由来して「勝関橋」と命名されました。

■「勝 関 橋」の時の流れ

勝関橋は昭和15年に国家的イベントとして計画された万国博覧会のメインゲートとして計画されました。昭和8年6月10日に工事を着手し、資材が不足する中、7年をかけ、昭和15年6月14日に完成しました。東京市(当時)、

銭高組を主体とし、石川島造船所(現 I H I)、横河橋^{きょうりょうせいさくしょ}梁製作所、川崎車両で工事を行いました。当時は、隅田川を航行する船舶が多く、陸運よりも水運を優先させる可動橋として設計され、大型船舶の通航を可能としました。

午前 9 時、午前 12 時、午後 3 時の 1 日 3 回、1 回につき 20 分程度開いていました。

さらに昭和 22 年 12 月 24 日には都電が開通しています。しかし、東京オリンピックが開催された昭和 39 年以降は、跳開回数は年間 100 回を下まわるようになり、昭和 45 年 11 月 29 日を最後に開くことはなくなりました。



■^{かちどきばし}勝鬨橋の規模と構造

橋長：246 m 橋幅：22 m 橋梁総重量：8,480 t

橋台・橋脚：鉄筋コンクリート造

上部構造：中央二連の跳開部(可動部全開角度：70度)固定部は下路式 タイドアーチ



■^{かちどきばし}「勝鬨橋」の今

《橋の周辺整備^{せいび}》

平成 2 年から 3 年にかけて、銭高組施工で歩道の御影石張り、街灯の整備^{せいび}、歩道

と車道境界の防護柵設置^{ぼうご さくせつち}を行い、ほぼ現在の姿^{すがた}となりました。また、「隅田

川テラス」工事にも参画^{さんかく}し、平成 18 年、「勝鬨橋」周辺部整備^{せいび}が完成しました。

《ライトアップ》

平成 10 年より、夜間ライトアップが始まりました。周辺建物のネオンとの対比^{たいひ}を考慮^{こうりよ}して、アーチ部分をグリーンのライトで構造美^{こうぞうび}を浮かび上がらせ、

水平部は橋の線を強調するためにブルーにライトアップされています。川風に
あたりながらの隅田川^{すみだ がわ}テラスの絶景は、夏の夕涼みに最高の場所です。

《開かずの跳開橋をあげたい》

隅田川^{すみだ がわ}に架かる勝鬨橋^{かちどきばし}を開け、下町の活性化につなげたいという動きが市民グループを中心にあります。土木建造物が利用者のための空気のような当り前の存在から、ありがたさを再認識し、先人の技術^{ぎ じゅつ}力を知るために、是非実現させたい企画です。

《重要文化財としての勝鬨橋^{かちどきばし}》

勝鬨橋^{かちどきばし}は、我が国で最大規模の跳開橋として、当時の最先端^{さいせんたん}の技術^{ぎ じゅつ}を駆使して建設されており、我が国の橋梁技術^{ぎ じゅつ}史上、高い価値^{か ち}がある橋梁として隅田川^{すみだ がわ}に架かる「清洲橋」「永代橋」と共に平成19年6月に国の重要文化財に指定されました。

つくだじ ま 佃島

佃^{つくだ}大橋の中腹から眺めると、左手に巨大なビル群『大川端リバーシティー21』、その裏には、戦前の古い町並みが今も尚残っています。佃島^{つくだじま}は、新旧が交錯する不思議な空間として存在している。隅田川^{すみだ がわ}を渡ったあたりから醤油の香ばしいにおいが漂ってくる。その正体は佃煮屋さんである。

江戸時代からずっと続く町の匂いにそそられて、つくづく日本人だと実感す

る。そこから見える住吉神社を目指して歩くと、歴史を物語る家の隣^{となり}に、新^{しん}築^{ちく}したばかりの家があった。その門扉^{もんび}を見ると、個人の表札と並んで「佃^{つくだ}」の字がつく屋号がかかっている。仲買人の家だ。数こそ減ってしまったが、かつては佃^{つくだ}島^{しま}住民の3割の人が仲卸^{なかおろし}を営んでいた。生業を変えても昔の屋号で呼び合う人もいう。住吉神社の境内を抜け佃^{つくだ}小橋に向かう途中、まるで時間が止まったかのような路地^{ろじ}をいくつも発見した。すでに主を失ってしまった家も多いようだが、慎ましく落ち着いた雰囲気、現役の下町風情。路地^{ろじ}

には必ず丹精を込めた盆栽と自由気ままなネコがいる。どちらも高齢化したこの町にはなくてはならない存在なのだろう。

や つ ぱ り 佃 煮

佃^{つくだ}煮は、魚介などを醬^{しょう}油^ゆ煮にしたもの。江戸時代から伝統^{でんとう}的に続いている東京の味覚だ。キャラブキ、葉唐辛子など野菜類もあるが、ここ佃^{つくだ}島^{しま}で人気なのは昔ながらの小魚^{かいるい}、貝類^{こんぶ}、昆布など。

使う魚は、もちろん江戸前の取れたて、が一番望ましいのだが……。

「昭和30年代までは、東京湾でもたくさん魚が獲れたので、それを材料にしていたんですよ。今では全国の産地から材料を取り寄せていますけどね。」と佃^{つくだ}煮屋の主人は言う。

さて現在、発祥^{はつしょう}地・佃^{つくだ}に残る佃^{つくだ}煮屋は、3軒。いずれの店も味にはのれんをかけた自信がある。佃^{つくだ}煮は、現代人に不足しがちなカルシウムをはじめ、タンパク質、鉄分、無機質などを豊



富に含んでおり、最近では健康食品としての評価も高い。 添加物を一切使用していない（少なくともここ佃^{つくだに}島では）保存食でもある。

「佃^{つくだに}煮は、炊きたてのご飯と相性が抜群でしょう。酒のつまみにも合いますしね。後はお客さん自身がおいしいと思った食べ方をすればいいんですよ」 と佃^{つくだに}煮屋の主人は言う。

佃住吉神社

大阪佃に住吉の社(現 田蓑神社)がありました。その後、天正年間より大阪田蓑島の人々と徳川家康公とが深い^{かか}関わりを持つようになり、家康公の漁業の^{かたわ}傍ら田も作れとの命により、村名を田蓑から佃へと改めました。その後、家



康公が関東下降の際、摂^{せつつ}津国佃の 漁夫 33 人と住吉の社の神職平岡権大夫好次が分神霊を奉載し江戸へ下り、寛^{かんえい}永年間に幕府より鐵砲^{てつぽう}洲向かいの干潟^{ひがた}を^{たまわ}賜り築島しました。そして故郷の名をとり佃島とし、この地に社地を定め、正保3年(1646)6月29日住吉三神、神功皇后、徳川家康の御神霊を奉遷祭祀しました。これが佃住吉神社の起源です。

佃島は江戸湊^{みなと}の入口に位置し、海運業、各問屋組合をはじめ多くの人々から海上安全、渡航安全の守護神として信仰を集めました。その後、月島、勝どき、豊海、晴海と埋め立てが行なわれ、その地域の産土神(氏神)として信仰されています。

漁師町の面影

佃島^{つくだじま}はかつて漁師の町だった。江戸時代

大坂の佃^{つくだ}村の漁師達に移住してきたのが始まりとか。

今でも、彼らの子孫であり元漁師の方々は、

佃島^{つくだじま}に住まれ、次のように語ってくれた。

「徳川家康が真田幸村に追いつめられ、た時船を出して命を助けたのが、大

坂佃島^{つくだじま}の漁師。それが縁で、ここに

来たらしいよ。漁師だったって名字帯刀

も許されて禄^{ろく}(給与)ももらっていた。

だから優雅^{ゆうが}っていうかさ、漁^{りよう}の出来

ない時期には、へっちゃらで遊んでいた。

そんな気質^{きしつ}は今でも残っているんじゃないかな。」昭和初期まで、漁^{りよう}に出

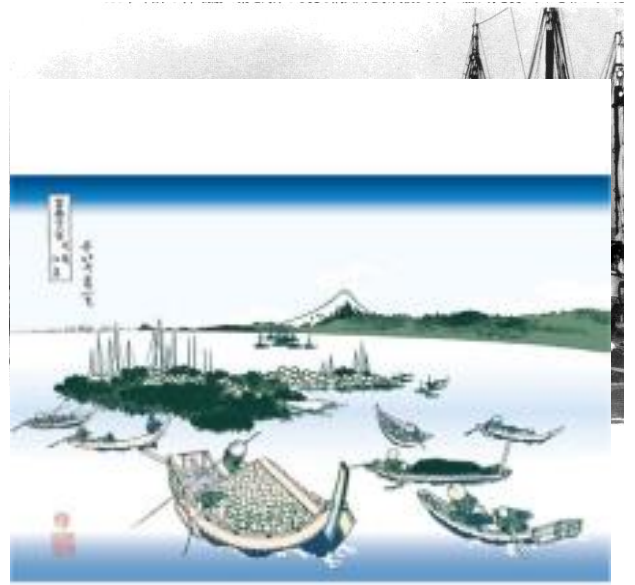
ると船が沈^{しず}む寸前まで魚を積^つんで帰ってきたとか。漁場は淡水^{たんすい}と海水が入り交

じる隅田川^{すみだがわ}河口など。コハダ、ハゼ、アナゴ、メゴチなどが捕^とれたようでした。

月島

月島は、工場の町でした。対岸の築地明石町が、“表向き”の近代化を象徴^{しょうちよう}

するエリアであったのに対して、月島は日本の近代化に不可欠^{ふかけつ}であった家内制^{かないせい}



工業^{こうぎょう}（小さな）の工場が寄せ集まった "裏"の部分であった。

明治から昭和にかけて、新興の工業用埋立^{うめたて}地・月島には、日本の各地はもちろんアジアからも労働者が集まり、日々過酷^{かこく}な仕事^{しごと}にいそしんでいたといわれている。だが、現在の月島は、そんな記憶を忘れてしまったかのように、穏^{おだ}やかな町並みが続いている。

現在は町工場もめっきり減ってきたが、月島のイメージでは必ず登場する長屋も又、徐々^{じょじょ}に櫛^{くし}の歯^ぬが抜けるように少なくなっている。まるで両^{りょう}袖^{そで}をもがれた様な形で両隣の家が潰され、ポツンと一軒だけ残されている姿は、無惨^{むざん}としか言いようがない。ここも近い将^{しょう}来^{らい}高層^{こうそう}マンションに変わってしまうのでしょうか。月島を歩いていると、こども達の姿をよく目にする事が出来る。狭い路地^{ろじ}を自転車で走り回る"悪ガキ"。駄菓子屋にはバーゲン会場のおばさま方さながらにこども達が群がり、菓子選びに目を血走らせている。現在月島名物となったもんじゃ焼きは、そもそもこどものおやつでした。このまま勝鬨^{かちどき}を過ぎて、豊海^{とよみ}方向に歩いていくと、今でこそ運河に囲まれてしまった月島ですが、かつての東京湾^{とうきょうわん}に面していた海の町だった味わいを感じながら、豊海^{とよみ}あたりで、海風に吹かれる事が出来るでしょう。

◇月島観音堂

1951年の建立で、ご本尊は、観世音菩薩（信州善光寺大本願にて入魂）と一光三尊如来（善光寺のご本尊）を安置しています。開運、特に遺失物の発見と病気の平癒にご利益があるようです。毎月7日の日がご縁日で、節分には、善

光寺産のお坊さんのお経の後、西中通に設けた台の上から、豆まきをします。



◇西中通

西中通は、明治の後半より両側に商店が集まり、他の通りにある工場の従業員を中心ににぎわってきました。大正に入ると、更に道の真ん中に露天が並びかなりの賑わいが続いたようです。関東大震災で一旦焼失しながらも直ぐに復興し、第2次世界大戦までは、

東中通などの工場発展^{はってん}と共に、繁栄が続きました。敗戦後は、月島地区は空襲で焼けなかったため、人口は減少しなかったものの工場が徐々^{じょじょ}に月島から移転していき安定期

に入りました。隅田川^{すみだがわ}を渡った他の地区で

は、高層ビル^{こうそう}が次々と建つ中、月島では、横

割り長屋が中心で大きな変化がありませんでした。そして、1960年前後「大人向けのもんじゃ屋」が開店を始めた。



◇^{つきじ}築地市場から豊洲市場に市場を移すはずでしたが・・・

東京都中央区の^{つきじ}築地市場が移転する予定の江東区にある新しい市場。建物の下に土壌汚染対策の盛土がなかったことがわかり、都はいつ、だれが盛土をしないことを決めたのかを調べていました。

都の小池百合子知事は1日、当時の中央卸売市場長の副知事ら8人が、都の^{せい}整備の考え方に反して独りよがり盛土をしなかった責任者と認定する報告書を発表しました。^{つきじ}築地



市場からの移転については、施設の安全性を調べる専門家会議の判断などをもとに決める事としました。

※もう少し詳しく解説
さて昭和初期から日本の台所を担ってきた^{つきじ}築地市場が移転しようとしています。

予定では2016年の11月17日に、豊洲新市場に移行し、現行の^{つきじ}築地市場は解体されることになっていました。





しかしながら、この移転計画には、反発する声が少なくありませんでした。その多くは、^{つきじ}築地で働く人達から

噴出しているものです。その後行われた東京都知事選においても、当選した小池都知事を含めた何名かがこの^{つきじ}築地市場の豊洲移転問題を争点に掲げていました。一体、何が問題なの でしょうか。今回は、



^{つきじ}築地市場の豊洲移転問題と、どうして反対意見が出ているのか、そして、それでもなぜ進められているのか、をわかりやすく解説していきたいと思います。

◇なぜ移転しなければならないのか？

まず第一に、なぜ^{つきじ}築地市場は移転しなければならないのでしょうか。

^{つきじ}築地市場の歴史は古く、1935年に開設されました。すでに80年が経過しています。当然、施設の老朽化が進み、建物の一部が劣化して破損するなど、安全性に不安を抱えています。また、施設の拡張ができない構造のため、スペースの確保が困難になり、商品を一時的に屋外に置かざるを得ない状況にもなっています。

これでは、高度な品質の保持・衛生管理が困難です。また、当初は列車での運送を想定して建設されたため、大型トラックの搬入スペースが不足しています。つまり、構造が時代遅れになってしまっているのです。これらを踏まえ、



東京都は 2001 年に豊洲への移転計画を進めました。



築^{つき}地市場のまま改修することはできないのか？

「移転じゃなくて、改修ではダメなの？」と思う方がいるかもしれません。

確かに前述した問題点については、改修・整備^{せいび}・リフォームによって解決できそうな問題のように思えます。実は東京都は、これまでも築^{つき}地市場の再整備^{せいび}に取り組んできました。



平成 3 年から再整備^{せいび}工事が着工され、進められて来ましたが、平成 8 年にこのままでは当初予定していた予算よりも多額の費用がかかってしまうこと、工期が 10 年以上かかることが判明し、再整備工事を中断・白紙撤回しました。この時点で、約 400 億円の費用が投下されていたようです。

このように、築^{つき}地再整備^{せいび}計画は失敗したことにより、「移転した方が早い」という結論になったのです。

ちなみに、ここまでは東京都側の主張です。こういう状況だから、移転した方が良いんですよ、という説明です。

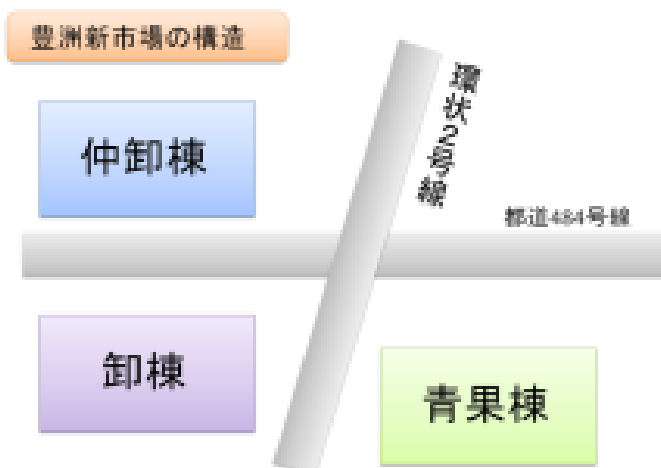
豊洲移転反対派の主張

しかし、この移転計画には、反対する人が少なくありません。特に、^{つきじ}築地で働く業者からの反発は非常に大きいものがあります。彼らは、なぜ豊洲移転に反対しているのでしょうか。

交通・物流アクセスが悪い豊洲新市場の構造は以下のようになっています。

青果棟（5街区）、水産^{なかおろし}仲卸売場棟（6街区）、水産卸売場棟（7街区）が、それぞれ都道484号線と環状2号線で分断されているため物流と交通のアクセスが非常に悪くなっています。

特に環状2号線で分断されている点については、青果物や水産物の移動スピードが確実に遅くなる、という指摘があります。



◇施設が使いにくい

なかおろし 仲卸 業者からは、^{てんぼ}店舗が狭いという

批判が出ています。現在確保されているスペースでは、マグロなどの大型魚をさばくことが難しい、という指摘です。「狭くてマグロが切れない！」このような設計になってしまった背景としては、80年前とは違って、いろいろな法律や条令が出来、手洗い場などの設置や規制が厳しくなった結果、その条件を満たすためにはこのような施設構造にしなければならなかった、という東京都の主張です。



その他にも、トラックの搬入スペースが狭すぎたり、敷地内の道路が行き来にあまりにも不便であったり、細かいところで使いにくさ、が予想されているようです。

観光施設「千客万来」の問題

東京都は、豊志新市場に併設して、「千客万来」という観光施設の建設を計画しています。東京都の計画では、年間数百万人の観光客の来場を予定していますが、市場で働く業者からは「すごく邪魔」という意見もあります。また、「千客万来」への物品搬入についても、大きな問題があります。「千客万来」への搬入経路は都道484号線を導線とするため、青果棟の導入経路と競合してしまいます。「千客万来」の搬入トラックが都道484号に停滞した場合、青果棟への搬入トラックと重なって、大渋滞を引き起こす可能性があります。

「青果棟」は当然、この経路が混雑するため、認めないでしょう。それでは、「千客万来」はどこから物品を搬入すればいいのでしょうか。

この問題によって、当初決まっていた事業者であるすしざんまいの「喜代村」(すしざんまい)と「大和ハウス工業」が撤退を表明しました。すしざんまい社長の涙の撤退会見をご覧になった方もいるのではないのでしょうか。

新しい「千客万来」の事業者は、未だに決まっていません。

◇豊洲の土壌汚染問題

さらに、上記問題に加えて、極めつけの大きな問題点が浮上しました。それが、豊洲の土壌汚染問題です。豊洲新市場の予定地は、実は昔、東京ガスのガス製造工場が建っていた場所なのです。その影響か、土壌調査をしたところ、土地の一部から、ベンゼンと

いう発がん性物質が環境基準の 43,000 倍も検出されました。そのほかにも、汚染物質が続々と検出されたようです。

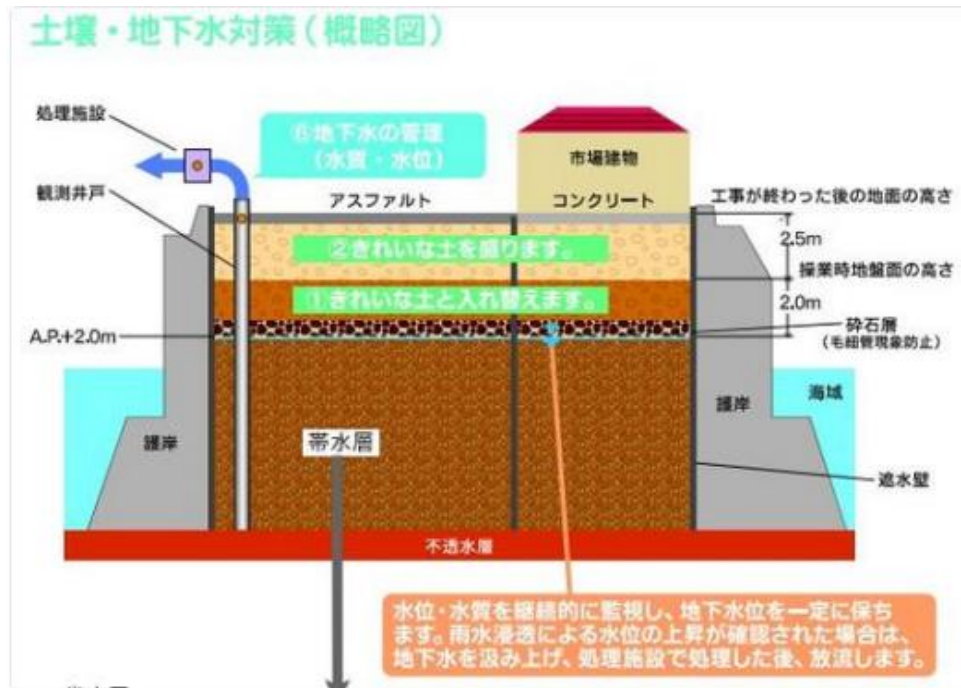
食品を扱う場所において、この土壌汚染問題は致命的です。新市場に反対する人たちは、移転計画の延期・撤回を強く求めました。

東京都はこの土壌汚染に対して、万全の対策をアピールしていますが、働く人や買い物客の不安を完全に拭い去るのは難しいのではないのでしょうか。

◇なぜ東京都は強引に移転計画を進めようとしたのか？

これらの問題点がありつつも、東京都はなぜ強引に移転計画を進めたがるのでしょうか。そのキーワードは「東京オリンピック」です。実は、東京オリンピック時に選手村と競技エリアをつなぐための主要道路として「環状2号線」という道路の建設が計画されています。今も部分的に開通しているのですが、この環状2号線の建設計画に、^{つきじ}築地市場の跡地が計画されているのです。

東京オリンピックが決まるまでは、市場と話し合いながら進めてきた東京都ですが、オリンピックが正式決定したとなれば、そんな悠長なことは言ってい



られません。「環状二号線作るから、さっさと出て行って！」という東京都の姿勢が伺えます。この移転問題を調べてみると、この記事にあるように、いろいろな問題が噴出しています。これらの問題は、ほとんどが「市場関係者との話し合い」の不足によるものだと思います。



オリンピックという東京都にとっての最大優先事項が出来てしまったために、働く人たちとの話し合いをおろそかにし、こんなにも批判が起こる新市場になってしまいました。

◇築地市場と豊洲市場のこれから

「築地は守る、豊洲を活（い）かす、ということを基本方針にさせていただく」

2017年8月、臨時の記者会見を開いた小池氏は、5年後をめどにした築地市場の再開発と、豊洲市場の機能強化を打ち出しました。

当初の計画では、昨年11月に豊洲市場に移転し、築地市場の跡地を売却。約4千億円の売却益で豊洲の整備費を賄うはずでした。しかし、小池氏は知事就任直後の昨年8月、都幹部や都議会への根回しをしないまま、「安全性への懸念」などを理由に豊洲市場への移転延期を表明した。その後、土壌汚染対策の盛り土がなかった問題が発覚するなど、「安全・安心」が最大のテーマになりました。しかし、この日の記者会見で「これまで吟味されていなかった」と小池氏が強調したのは、市場の経済性だ。今年1月、小池氏が立ち上げた「市場問題プロジェクトチーム」の調査で、豊洲市場の運営費が年92億円の赤字になることが明らかになっていました。東京都は20日、築地市場の業界団体との協議会を開き、豊洲市場への移転時期を2018年10月11日に決定しました。都と業界は11月上旬の協議会で18年10月中旬とすることは合意していましたが、業界内の一部の反発で具体的な日取りの調整が難航していた。

移転日が決まったことで、都政最大の懸案の市場移転が大きく前進する事になりました。このように小池都知事は、『市場移転・築地も残す』という方針を固め、2018年11月に移転すると決めました。まだまだ問題はありますが、方向は決まりましたので、オリンピックの準備と共に工事が進んでいく事でしょう。そして、何よりも、都民にとって安全な食品を提供してくれる市場になってもらわなくては困ります。

